雑事記（40）　エッセイ4題

盛丘　由樹年

次の4題のエッセイにより構成される。

・原田康子の短編『音』
・ヒトの眼球が白いわけ
・西郷隆盛の母
・バンザイ突撃を多用した日本軍

原田康子の短編『音』

原田康子（1928～2009）の『音』は、季刊雑誌・ショートショートランド１９８２年秋号（講談社刊）に掲載された短編小説だ。たまたま最近になって、私が部屋の本棚の隅をつつき、その本を取り上げ、そのページをめくって読んだものであり、そばをすする音が主題になっているところがおもしろかった。

この要点を紹介すると――

晶子の恋人は、ほっそりしたやさしげな若いサラリーマンで、身だしなみがよく、乱暴な言葉を口にしない青年だったが、晶子にとって奇妙なくせを持っていた。青年は一風変わった、不思議な食べ方をした。それは、めん類を食べるとき音を立てないことだった。晶子がすすって音を立てながら食べるのに対し、青年はひっそりと食べる。晶子は気持ちに引っかかるものを覚えた。違和感のような、奇妙さだった。行儀がよいことかもしれないが、それは覇気の乏しい証拠ではないか、と思い込んだ。

彼との仲はなかなか深まらなかったし、その食べ方が気に入らなかったから、晶子は別れることにした。青年にはその理由を明らかにしなかったから、青年には未練が残った。「なぜだ？」と思ったことだろう。

二年ほどして別の男と結婚した。今度の男は、服装には無頓着で、快活で、よくしゃべり、体格もよかった。めん類の食べ方も、彼はいかにもうまそうに、音を立ててすすったから、申し分なかった。

やがて生まれた一人息子。それが成長し、他の土地の大学に入ったから、夫婦二人は、日曜の昼に決まってそばを食べる生活をする。そば好きの夫は、だらしない格好で、騒々しくそばをすする。

あまりのことに嫌気がさして、昌子が不平をもらすと、夫は「ばか言え、お上品に食ってたんじゃ、食っ

た気はせん」と言い放つ。
無頓着に見えたのは実は粗雑で、快活と見えたのは無神経の裏返しであったのだろうか。女房の前だからこそのだらしなさとは思っても、昌子は情けなかった。行儀のよかった昔の男を懐かしむ――

昌子は現実に幻滅している。無頓着に見えたのは実は粗雑だったことに気づいた、というくだりがおもしろい。若かった昌子には、長所が欠点に、欠点が長所に見えてしまったわけだ。著者は、めん類の食べ方の違いを中心に、性格の異なる二人の男を対比させ、よく考えたつもりの結婚であっても、思うように行かない機微をうまく表現している。
晶子が以前、付き合っていた青年の静かな食べた方は、珍しい部類であり、晶子には奇異に感じられたから、それが、結婚への意欲をくじいてしまった。
食べ方にはいくつかの作法があり、国や地域によって異なっているが、音を立てて食べることが作法になっているのは、世界的に珍しいことだろう。特にめん類をすすって食べることは、日本の文化・伝統の一つかもしれない。それがめん類を食べるための基本だと思う人が多くいて、わざと音を立てる。日本では、そばはすすって食べるのがおいしい、という風潮がある。
実は、私自身、めん類を食べるとき、音をたてない傾向がある。それほどこだわることでもないのだが、わざとすすったりはしない。めん類はすすって食べるのがおいしいという説には疑問を持っている。すすったところで、味覚が変わるものではないだろう。味が変わらないものであれば、音を立てない方が好ましい。また、彼らは数本のめんを長いまま、ズルズルと末端まで口に入れているが、私は、それが長すぎるなら、適当なところで噛みちぎることの方が食べやすいと思ったりする。
しかしながら、昌子の夫のように、おいしいと思い込んで食べているのならば、それでいいのかもしれない。おいしく食べるための秘訣だと思い込み、作法などを気にしないで、気兼ねなく食べるよさはある。対面する妻に「うるさい」と言われようが、周囲の人にいくら嫌われようが、外国人が眉をひそめようが、傍若無人の振る舞いを楽しむ……。
食べ方全般に、勢いよく口に入れたりする人もときどき見かける。それで若さを示しているのかもしれないが、単に飢えているだけだったりして……。彼らは「これが日本の文化だ」と言い張って、ズーズーしく

正当化したりする。世界では非常識であるかもしれないけれど、日本では、それをみんなでやっているものだから、しょうがない。

ヒトの眼球が白いわけ

1．ヒトの眼球の白さ

ヒトの目は、くっきりしている。他の動物と比べて、眼球の白（白目）と瞳の黒い部分が際立っている。チンパンジーなど、白目を隠すようにつぶらな目をしており、しかも白目を着色して一層目立たないようにしている。ヒトは切れ長の目をして、白目を隠していない。ヒトらしい特徴の一つだろう。　それはなぜだろうかと考えたい。いくつかの学説や通説があって、なかなか議論が活発なテーマだから、いくつかの有力そうな説を拾ってみたい。

ただし、瞳の黒さには人種や個人差によって濃淡が異なり、色彩を帯びることがある。

サルや類人猿（チンパンジー、ボノボ、ゴリラ、オランウータン、テナガザル）などの場合、眼球の白さはほとんど目立たない。茶系統の色素が入っているらしく、眼球が白ではない。その理由として、視線をどこに向けているのか、周囲の固体に気づかれにくくしているという。眼球の動きが察知されにくい。

チンパンジーについて、白目が目立たないのはなぜか、という研究は、１９９７年にネイチャー誌に発表したのが最初と言われている。京都大学野生動物研究センター教授の幸島司郎さんや小林洋美さんたちが、類人猿の目はサルの目に似ていて、人間の目だけに白目があることを発見して、論文にまとめている。

ＮＨＫテレビのうんちく開陳番組「チコちゃんに叱られる」２０２０／１１／２０の放送でも、「なぜ人間には白目があるの？」の設問で、取り上げられていたものだ。

ちなみに、その時のチコちゃんの回答は、「狩りが上手になるから」だった。

そこでは、チコちゃん流の簡略化した回答であり、説明を加えた研究者は、それもひとつの理由だとして、断定したわけではなかった。要は、〈狩のとき、仲間との連絡に目を動かした。白目がある方が伝わりやすい〉としていた。でも、広い平原で声を出せない状況なら、目配せよりも、身振り手振りのほうが確実だ、と私には思えてくる。

伊豆シャボテン公園の飼育員の話として、「チンパ

ンジーに白目がないのは、お互いどこを見ているか分からないようにするためです」「目が合って争いにならないように、最初からどこ見てるのか分からなくしてるのです」

2．視線

類人猿の社会では、視線が他の個体に気取られないことが、生存に有利になっていると考えられているし、実証されてもいる。たとえば、向こうにある食べ物に視線を向けていると気取られてしまうと、その食べ物は、それに気づいたサルによってすばやく持ちされてしまい、自分は食べることができなくなる。若いオスザルが、メスザルに視線を向けていると、ボスザルに攻撃されてしまう恐れがある。視線によって、自分の手の内がわかってしまっては、機先を制されてしまう。

上下関係の厳しいサルの世界では、アイコンタクトには威嚇や挑戦の意味があるらしく、たまたま目が合っても、下位者は目をそらさなくてはいけない。そのままだと、「テメー、上位のオレの座を狙っているんか？　オレに挑戦するとはいい度胸だ」と思われてしまう。どこを見ているのかわかないような風情でいることが、無難なのだ。「オレの方が力が強い」と思ったら、にらみつけていい。「ガンをつける」という行為になるらしい。

ヒトの中には、アイコンタクトが苦手な人がいるが、そんなサルの時代の習性が残っているのかもしれない。現代の若者の間でも、他人の顔をじろりと見ていると、「ガン見している」といって嫌われることになる。

ヒトと類人猿はその昔、先祖を同じくしているから、もともとは同じように白目をしていたと考えられるが、類人猿は進化し、白目を着色したが、ヒトは白いままになっているのだろう。

ヒトでも、そんな視線の向きによって意図が他者にわかってしまうと、不利益になることがありそうだ。きょろきょろしていたのでは、物色していると思われてしまい、みっともないとされる。ポーカーフェイスでいることは、ゲームでなくても、多くの場合で損にならない。

3．情報伝達

しかし、ヒトの場合、多少の不利益があることよりも利点が大きかったことになる。その一つは、白目があることで表情が豊かになったことだ。表情が情報伝達に一役買う。

怒ったことを示すには、目をむいて、白目を多く出す。あるいは、「白目で見る」ことで、相手を軽蔑し

ていることも表わせる。白目を使って、さげすむ表情を作れる。

自分の意図が相手にわかることは、情報伝達の手段に使える。視線による情報伝達のしやすさがある。情報伝達は、自分の不利益というよりも、社会的利益が大きい。「目は口ほどに物を言い」ということわざがあるように、視線を走らせることによって、合図が可能だ、「目配せ」によって指示が可能だ。「やれ！」という合図になる。言葉を口に出さずとも、手ぶり身ぶりを加えれば、かなりの情報伝達が可能だ。

4．顔認識

ヒトの目がくっきりしているのは、顔の識別に主要な役目を果たしている。目が識別の一番のポイントだろう。特に、相手の目の形を見て親子関係を識別することが、乳幼児にとっては大事なことだろう。母とその乳幼児が見つめあうことは、基本的な親子の識別をしていることになるだろう。母を認識できるようになると、それ以外の人が近づくと、人見知りする。たとえ、父であっても……。

濃い色のサングラスなどかけて、隠してしまうと、他人には目の動きがわからないから、怪しまれる。目が悪いためにサングラスをかけていると認識されるまで、怪しい人物と見なされるだろう。

目には、他人をひきつける魅力となっている「効能」もある。特に異性をひきつける役割がある。チャーム・ポイントだ。化粧で目の周りを強調したりする。女性の輝くような目で見つめられたら、男心が揺れるというものだろう。そこで目をそらしたら、「恋は成立しない」だろう。

まとめてみると、固体としては、目の動きが他の者に気取られてしまうと、不利になるけれど、群れ（集団）としてのコミュニケーションの便利さがある。チンパンジーなどは群れで暮らしているけれども、固体の線損戦略が優位に働き、白めに色を入れた。ヒトは高度な社会性を維持する必要があり、白目をくっきりと目立たせる戦略を採用した、となる。単なるコミュニケーションだけでなく、目は顔認識（個体識別）のために大きな存在理由があり、魅力的な目の脇役（引き立て役）として白目を発達させた、と考える。

西郷隆盛の母

西郷隆盛（1827～1877）の母、マサさんは、隆盛ら子どもたちに「負けるな、ウソをつくな、弱いものを

いじめるな」を、口癖のように繰り返し聞かせていたという。２０２１年８月１０日に放送のＮＨＫのＥテレ「知恵泉」で紹介されたものだ。

三つの禁止ことばを連ねている。「負けるな、ウソをつくな、弱いものをいじめるな」だから、覚えやすい言葉で戒めている。子どもたちが、常に心に抱いておくべき言葉として、なかなかよい。大人になっても、忘れないだろう。それぞれに、私が解説を一言二言加えよう。

・負けるな

通常の暮らしの中で、相手にも、自分にも勝てないことは多くある。勝ちにこだわることに意味を見出せないこともある。そんなとき〈負けてもいいや〉という弱気が心に浮かぶものだ。そんなとき、〈**負けるな！**〉という天の声（母の声ではなく）が響く。負けるにしても、もうひとふんばりする気力が得られるものだ。それがやる気につながるものだろう。自分自身を激励することになる。

・ウソをつくな

だれでも、そこそこ賢くなれば、ウソをつけるようになる。やや大げさな自慢話をすることは楽しい。その場の判断で、ウソをつくことが自分の立場を有利にすることもできる。過去のことを語らないのも一種のうそだろう。不利に陥らないための、予防策としてウソをつくときもある。相手をおとしめるために、悪意のあるウソをついて、ふれまわることもある。相手をおとしめたら、相対的に、自分が上になる。芸術的に、空想のような、発想豊かなものごとを表現することもできる。

マサさんは、子どもがウソをつくことがよくわかっている。人をだましてはいけない、小ざかしい、ごまかすようなウソはつくな、と言ったわけだろう。大人になっても、ウソをつく人は多くいるけれど……。軽いウソなら、寛容な態度を示すことでよい。

・弱いものをいじめるな

隆盛は子どものときから体格がよく、いじめられることは少なかったかもしれない。体格を活かせば、いじめる側に立てる。いじめることは、子どもにとって楽しい。他者に弱みがあれば、あげつらう。遊び感覚でいじめる。弱いものをみればいじめたがる性質を、だれでも持っていることを母は知っていたのだろう。隆盛にもそれがあると、母は見抜いていたことになる。いじめたら、いつか仕返しされるという恐れがあるし、いじめないことで弱いものに兄貴分として慕われ、敬

われる可能性があることを知っていたのだろう。
子どもの世界は、ほとんどルールのない、弱肉強食の競争がある。それが子どもの遊びの本質でもある。それについて行けない者は、みそっかすとして扱われる。自分たちとは異質な存在は、特に障害者は、いじめの格好の対象になってしまう。他民族の子や性的マイノリティーもその対象だろう。女々しい少年など、いじめられやすい。それらはすべて、からかいの対象になる。健常な子どもの中に障害の子どもがいれば、自然にいじめが発生してしまうので、クラスを一緒にするなら、教諭などは、マサさんのように、事前に「いじめるな！」と言っておかなければならない。特別扱いにはなるけれど……。子どもの間では、いじめられることで、心身が鍛えられる一面があるかもしれない。

バンザイ突撃を多用した日本軍

・突撃

敵陣に対して突撃の号令で、一斉にスタートダッシュをする。すると、敵側から猛烈な射撃が加えられる。それにひるんではいけない。前後左右に同じように走る味方の兵士たちが、バタバタと倒れる。中にはうめき声や、悲鳴を発するものもいる。「ウガッ」「ギャー」、それらにかまっていてはいけない。ひたすら走る。倒れるまで走る。

銃弾だけではない、迫撃砲弾やロケット弾、どこからともなく大砲の弾が飛んできて、近くで炸裂する。一発で小隊が全滅してしまうこともある。

攻撃が終わったあと、死体累々の惨状が広がる……。

太平洋戦争中、この失敗の多かった戦術が日本軍で多用されたことに、私は残念に思う。同じ失敗を何度も繰り返していたのだから、作戦本部や司令部の幹部たちに脳がなさすぎる。突撃するなら、敵陣を砲撃や空爆で叩きつぶしてから行うべきものだろう。

倒れた者たちは指揮官の命令に従っただけのことだろう。いくら勇猛果敢な兵隊とはいっても、弾に当たれば、命がなくなる。陣営の前に身をさらすとは、自分から銃弾に当たりに行っているようなものだった。そんな光景が、多くの戦場で見られたという。

日本軍の指揮官たちは、敵が待ち構えるところに、兵隊を突っ込ませる戦術しか知らないのだ。かれら指揮官たちはうしろの方にいて、突撃が成功したか、どうかにしか関心がない。「ん？　失敗したか。それな

ら、もっと多くの兵を突撃させよう」と考えたりして。

・戦術

「日本軍はバンザイ突撃してくるので、単純だ」と、連合国軍の兵士たちに嘲笑(あざわら)われていた。

彼らから見ると、確かに、日本兵は恐れを知らない者たちだった。彼らは、何やら「何とかバンザイ！」などと叫びながら、全身をさらして走ってくる。しかし、重い装備の上に、旧式のサンパチ銃をかかえて走るものだから、スピードは出ない。実際はよたよたと走るだけだ。陣地は、だいたい高台に造るからから、日本兵は坂を上ってくる。どうしても走る速度が落ちる。時には鉄条網にからんだりして動けなくなる。

近づいてくる間に。しっかり固定した銃砲を水平方向に狙いを定めて撃ちまくれば、敵兵たちはバタバタと倒れる。音速より速い弾を無数に撃ちまくる。こちらの銃は射程距離が長いから、奴らの銃では届かない距離からでも撃ちまくれる。しかも銃弾は。鉄兜さえ撃ち抜く威力がある。近づいてくるほど、マトは大きくなるから、当てやすい。

ひとしきり戦闘が終わると、「ケッ、命知らずのバカどもめ！」と吐き捨てる。

そのバカさ加減にあきれるとともに、倒れた兵隊たちに哀れみの情が沸いてくる。手足がちぎれたりして、苦しんでいる者を見つけたら、息の根を止めてやるのが、親切だろう。（バシッ）

・突撃の有効性

太平洋戦争では、日本軍が突撃するシーンが多くみられた。日本軍、特に陸軍は、歩兵の突撃により勝機を見出そうとしてきた。古い時代からの伝統的な戦法だ。犠牲の多い戦法であっても、勝機を見出せるなら、これを多用するしかなかったようだ。それにしても、指揮官は、勝算があるなしにかかわらず、安易に突撃命令を出すケースが多い。

遠くから、弾を撃ち合っていたのでは、膠着状態になる。それを打破するためにも、前に進む。走って行けば、敵側は後退することもあるだろう。敗走し、総崩れになるかもしれない。日本の戦国時代ではともかく、近代戦では、機銃を据えた敵陣地に対して何千もの大規模な突撃でない限り、それで攻略に成功することはあり得ない。

それでも、一斉に突撃すれば、弾に当たらずに、何人か敵陣に到達するやつがいるだろうという期待を持つ。でも、何人かの歩兵が到達したぐらいでは、強固な近代設備の陣は破れそうにない。たとえ格闘になっ

たところで、体力的に勝る敵兵たちにねじ伏せられてしまう。

例えば、インパール作戦（１９４４年３～７月）で、日本陸軍がビルマ（現ミャンマー）側から大挙して広大なジャングルの山岳地帯を通り抜け、インドのインパールを占拠するために奇襲攻撃を仕掛けたが、コヒマ地区で急ごしらえの陣を構えていた１５００人ほどのイギリス兵守備隊の高性能機関銃（ブレン軽機関銃）の威力が絶大だった。それに圧倒され、歩兵の前進を阻まれたことが、作戦失敗の大きな要因の一つになった。日本軍側にとって、ここを早期に制圧できなかったことが大きな誤算になった。守備隊が持ちこたえている間に援軍が到着し、航空機、戦車などの近代兵器を繰り出して反撃してきた。そんな敵軍に対して、飲まず食わずの体力のない歩兵たちが下手な突撃を何度も繰り返しても、無駄だった。彼らは雨に濡れそぼれ、カやヒルなどの虫にもたかられた。やがて攻撃は不可能と思い知らされた師団長以下、戦意をなくし、絶望的な退却への道を歩んだ（白骨街道と称された）。参謀本部の連中たちには、帝国の将兵が戦意をなくすとは、もう考えならないことが、ここでは起きた。

・訓練

日本軍兵士にとって、この突撃の瞬間が晴れの舞台だ。何回も経験できるものではない。

この一回あるか、ないかの突撃のために、兵士たちは徹底的に訓練を積むことになる。上官の命令に反応して即座に飛び出て走る。少しでも遅かったり、仲間より遅れたりしたら、怒鳴られるだけでなく、殴られる。ともかく何発も殴られる。上官の中には、突撃を口実にし、新兵教育の一環として殴りまくった。突撃のときにひるまないようにと、殴りつけた。究極のパワーハラスメントだった。新兵たちは殴られ方を学ぶ。殴られ方が悪いと、また殴られた。

（出演：盛丘二等兵と上官たち）

「立て！　盛丘二等兵、歯を食いしばれ！」（ドスッ）

軟弱な盛丘二等兵は、また倒れてしまい、やり直したりして。「盛丘二等兵！　キサマー、そんなざまでは、突撃できんぞ！　オイ！、岡森上等兵、気合いを入れてやれ！　鍛えてやらんか！」

「ハッ、気合いを入れるであります」（**バッシン**）

兵士は誰でも戦地に赴けば、突撃命令が出されることを覚悟しなければならなかった。

盛丘二等兵は思う〈殴られれば、突撃に成功する確

率が高くなるのだろうか？　いや、そうではないだろう。みんな、突撃に不安を持っているから、奮い立たせようとしているのだろう。クソっ、岡森のヤツ、戦友と思っていたのに、力いっぱい叩きやがって……。少しは手加減してくれよ。いつか、あいつらを後ろから撃ってやる！〉と、疑問と怨念が沸き上がる……。

突撃するために殴られているのだと理解したろうか。そんな訓練によって、「突撃！」の号令で条件反射のごとく、兵士たちは飛び出す。そして「晴れの舞台」に上がったとき、何発も銃弾を浴びることになる。

・突撃が察知された

夜の闇に乗じて奇襲攻撃することも、日本軍の得意とする戦術の一つだろう。忍者的な、ふい討ち戦法だ。その方が成功率で高そうだ。夜の闇に乗じて敵陣に忍び寄り、近づいたときに一斉に襲いかかる……。そんな場合でも、集団で動けば、平原であろうとジャングルであろうと、どうしても察知されてしまう。ある地点まできたとき、サーチライトの明るい光を浴びることになる。すると、待ち構えていた敵軍によって猛烈な銃撃を浴びせられる。一例として、ガダルカナルで、精鋭部隊の一木支隊が、敵に占拠された飛行場を奪還するために決行した作戦（１９４２年８月）だったが、アメリカ軍の情報網がジャングルでの進軍を巧みに察知した。一木支隊は飛行場を目前にして、待ち構えていた米軍により全滅した。サーチライトの光を浴びることは「晴れの舞台」にふさわしい。

この作戦の失敗により、南方方面における日本軍の趨勢が大きく傾いた。ガダルカナルでの攻防戦はその後も続くが、日本軍にとって困難な局面に陥った。

・突撃をしなかった守備隊

敵軍の姿を見れば、号令がかかり、脱兎のごとく飛び出して、突撃していた日本軍だったが、例外もある。１９４４年ペリリュー島や、１９４５年の２月硫黄島（いおうじま）では、Ｂ２９による本土爆撃を本格化させるために、連合軍が大挙して上陸した。早期に落とせるはずだったが、連合軍にとって意外にも、日本の守備隊の頑強な抵抗にあい、激戦を展開した。

連合軍は、例によって日本軍はバンザイ突撃してくるだろうと高をくくっていたわけだろうけれど、そんなシーンはここではほとんど見られず、日本軍は徹底抗戦したから、てこずった。この戦闘の場合、日本軍は戦いに勝つことをあきらめていた。もとより勝ち目がなかった。徹底抗戦は、単に戦いを長引かせるだけの「時間稼ぎ」になっていた。

洞窟などにたてこもった日本兵たちを「駆除する」ために、連合軍は火炎放射器で火あぶりにする作戦をとった。たてこもる人々を火炎放射器で焼き殺すという発想は、なかなかのアイデアだ。日本の主要都市の建物や人々を焼夷弾で焼き尽くす発想につながる。

結局は、それぞれの島で日本兵は多数の戦病死者を出し、陥落した。

私は硫黄島では突撃しなかったと思い込んでいたが、見直してみると、3月26日に最後に残った者たち約800人が突撃を行ったという記録がある。それは本部の指令によるものでなく、現地部隊の独自判断だったかもしれない。弾薬や食料・水が尽き、極限状態に追い詰められたから、ほとんど自暴自棄のように、悲壮な突撃を敢行した。例によって「バンザイ」と叫んで、走り出したのだろう。泥と汗と垢にまみれ、無精ひげを伸ばし、やせ細った奇怪な姿でヨタヨタと……。援軍も救援物資もよこさない本部にあてつけるかのように。

それを日本では「玉砕した」と表現する。当時、玉砕は珍しくなかった。それぞれの玉砕の地では、わずかに生還できた者がいたけれど、負傷し、虫の息をしていた者が敵側の医療チームによって救出された者たちだけだろう。自ら投降することは、逃亡に等しいこととされた。ちなみに、当時の日本では、捕虜になったら、おめおめと日本に帰れなかった。徹底的に叩き込まれた戦陣訓に反することであり、不名誉極まりなかった。生き恥をさらすわけだから、いたたまれない。それも突撃する理由の一つになった。戦陣訓には、「生きて虜囚の辱めを受けず」という一節がある。「捕虜になるくらいなら、自決しろ」と言っているのだから、過酷なものだ。

世界的にみれば、捕虜になることは恥ずべきことでも何でもない。苦難の捕虜生活を経て自国に生還できれば、大勢に祝福されるものだ。英雄扱いされることもある。だが、日本では、それはあり得なかった。侮蔑の目で見られた。特攻に失敗したり、戦闘中にはぐれた者が本隊と合流したりしても、意地の悪い制裁が行われた。

「盛丘二等兵！　キサマは戦死したんじゃなかったんか？　明日の突撃では最前列に出て名誉を回復して来い！　さぁ、気合いを入れてやる！」（ボグッ）

「グワッ」